Ⅳ　家庭　１年次の成果と課題

１　成果

(1)　体験的学習を重視した題材構成の工夫と「学びのものさし」を用いた省察場面

家庭科の教科としての魅力は何だろうか。それは，学んだことをその日からすぐに生活に生かすことができるということではないだろうか。できなかったことができるようになる，そのことを自分自身が実感をもって実践することができる。自分のために，家族のために，身の回りの人々のために自分の身に付けたことを役立てることができることに，楽しさや喜びを感じられるのではないか。できる，ということが主体的に学ぶことにつながるとすれば，家庭科の学習において基本的な知識及び技能を身に付けてることは，よりよい生活を工夫する上で不可欠である。そのために，生活経験や他教科における既習内容を想起させたり，根拠をもって考えることができるように実験や実習などの体験的な学習を題材構成に位置付けたりした。また,「あたたかい着方を考えよう」と「すずしい着方を考えよう」のように関連のある二つの題材を合わせて扱ったことは，異なる季節の着方を取り上げ，気象条件の違いによる衣服の違いを比較・検討するとともに，着方の工夫について考えを深めることにつながった。さらに，被服実験を通して，色，形，素材，枚数の他にも，通気性，吸水性，吸湿性などの新たに獲得した「学びのものさし」を用いて，快適な着方を考えることができた。これらのことから，課題解決のために，被服実験等の体験的な学習を題材に位置付けたり，個々の考えの根拠とした視点を共有する場を設けることは，今後の生活に生かすことができる学びとして有効であったと言える。

(2)　新たな気付きや考えの可視化による実感を伴った学びの場の設定

生活の中から見いだした課題の解決に向けて，何を根拠として自分の考えとするのか，その判断は生活経験や学習による知識に裏付けられる。生活経験の中には習慣化されているものや家庭によって異なることがあるため，科学的な見方で自分の考えを語ることができるように，実験や実習の方法と記録の仕方を工夫した。実験方法は比較実験を取り入れ，数値や事象に着目し，他との比較・検討ができるようにした。比較対象があることで,「重ねる枚数が多くなると保温性も高くなった。」「素材が違うと保温性にも違いがあった。」などのように結果の根拠を明らかにして対話する姿につながった。肌着の必要性を確かめる実験では，夏の湿度の高い状況を疑似体験し，肌着の役割を知り快適な着方について考えた。実際に体験することで,「枚数が少ない方が涼しい」という考えに加えて,「快適さには吸湿性や吸水性，通気性の要素が必要なのではないか」と考察を深めていた。快適であるという概念は個人の感覚に左右される。客観的に事象を捉え，共有を図るために，時系列で今の快適さの状態を記入する不快度メーターを取り入れたり，両手の感じ方を記録する学習シートを用いたりした。不快さを可視化することにより，自分の考えの根拠を表す指標とすることができ，科学的に省察するにあたり有効な手段であったといえる。

２　課題

課題解決や家庭での実践における最適解を導く授業の展開

体験的な活動を基に省察する場では，複数の見方を用いて根拠をもち自分の考えを述べることができた。日常生活においては「快適さ」だけではなく「健康」「安全性」「経済」「環境」など様々な見方が必要であり，それらに子ども自身が気付き，よりよい生活のためにはどの見方を優先する必要があるのかを意識することが求められる。多様な生活環境や個人の感覚の違いをそのまま考えに反映させるのではなく，学習によって得た結果を一般化した上で，自分なりの考えをもつことができる授業展開が課題である。